

学び合いの中で、歌唱表現を深めるあうことができる子ども

ー 中学1年「曲にふさわしい表現で合唱しよう ～夢の世界を～」の実践から ー

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

子どもたちは、毎日たくさんの音楽に囲まれて生活している。この活動における事前調査でも、「聴くことが好きな曲がありますか。」という項目ではほぼ全員が「ある」と答え、具体的な曲名をあげている。「日常生活の中ではどういったかたちで音楽に親しんでいますか。」という項目では、音楽番組を見る、音楽プレーヤーなどで音楽を聴き気持ちを集中させる、部活や習い事などで音楽を楽しんでいる、等の回答が目立った。また「歌うことは好きですか」という項目では70%の子どもが「好き」と答え、得意な曲目を具体的にあげている。以上のことからわかるように、子どもたちの生活と音楽は密接に関わっており、音楽にふれることが心の安らぎにつながっていると考える。

音楽の授業にも意欲的に取り組んでいる。「明日という大空」の二部合唱では、歌詞の内容を色で表したり、旋律の盛り上がり線を線で表したりしながら自分なりのイメージをつくり、表現を工夫する姿が見られた。また「主人は冷たい土の中に」の独唱では、歌詞や旋律から感じ取ることのできるイメージを言語化することで、自分の気持ちをのせて歌う活動に取り組んできた。

本題材では、一人ひとりが自分の声の特徴を生かし、それらを合わせることで広がる声の可能性に着目させ、自分の思いやイメージを基により高い表現の技能を育てたい。そして、音楽を聴いて楽しむという受動的な楽しさから、主体的に表現をし、自分なりの音楽を発信して楽しむという能動的な活動へつなげていきたいと考える。

(2) 本題材の目標や内容と音楽科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本題材では、曲種によって様々な歌声があること気づき、自分たちが合唱の際に目指す歌声を考慮することや、一人ひとりのもつ声の特徴を認識し、曲に対するイメージを伝え合い、よりよい音楽表現へと工夫することをねらいとする。

本題材を展開するに当たっては、次の5つの教材を選択した。歌唱教材では混声三部合唱「夢の世界を」、多様な歌声を理解するために使用する鑑賞教材として、混声四部合唱「大地讃頌」、歌劇「アイダ」より凱旋の合唱、長唄「勸進帳」、「安来節」を取り上げる。

「夢の世界を」は各パートとも無理のない声域で歌い合わせることができる曲で、短時間で音取りができ、前半はユニゾンでの歌唱、後半はハーモニーを組んで歌うことから、自分たちの声づくりのための教材として適していると考えられる。

鑑賞教材では、本校3年生の演奏する混声四部合唱「大地讃頌」、歌劇「アイダ」より凱旋の合唱、長唄「勸進帳」、「安来節」と自分たちの演奏する「夢の世界を」の演奏を聴き比べる。それぞれの声の響きの特徴や、四部合唱のハーモニーの厚みを自分たちの演奏と比較することで、自分たちの演奏に足りないものに気づき、自分たちが合唱の際に目指す歌声のイメージが深まると考えている。

これらの曲から感じる一人ひとりの思いやイメージは、三者三様である。子どもたちが教え合いや学び合いの活動の中で、他の人の思いやイメージに共感し合うことでさらにイメージや思いをふくらませ、自分なりにその音や音楽を感受することで、より深い音楽表現へとつなげたいと考える。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

本題材では、歌唱を中心として思考力・判断力・表現力を育てていく。学び合いの場面としては、一人ひとりが歌詞の内容や曲想から感じ取ったことや、声部の役割や全体の響きなどの感じたことを言語化し、個からグループへ、グループから学級へとイメージを伝え合うことで、楽曲に対する思いを共有し、さらに表現を工夫しながら全員で合唱をおこなう活動を設定した。その際には、リズム、旋律、構成、テクスチャといった音楽を形づくっている要素や要素同士の関わりなどを、音楽的根拠をもって思考・判断できるよう取り組むことにした。

学び合いの過程では、まず、自分の考えや発見、思いやイメージを付箋に書き、付箋を基にグループで話し合う。そして、グループでまとめた考えや発見、思いやイメージをクラス全体に広げ、共通の思いやイメージをもとに表現を工夫し、深めていくという活動をくり返し行うこととした。子どもたちが、音楽から受けていた漠然としたイメージを言語化し、グループで話し合うことで、楽曲に対するイメージを広げ、さらに深い音楽表現ができるようにする。

また、初めて混声三部合唱に挑戦していくため、まず、グループで階名唱とアルトリコーダー演奏をすることで音程感覚とハーモニー感覚をしっかりと身につけていく。自信をもって歌えるようになったところで、グループ活動による学び合いの場面を設定し、楽曲の特徴やよさなどを言葉で表し、イメージをふくらませていきたい。

2 題材計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	夢の世界を歌ってみよう	1	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の1年生による「夢の世界を」の演奏を鑑賞し、歌詞や旋律の特徴、感じたイメージ、声の出し方を話し合い、発表する。 ・階名で歌ったり、アルトリコーダーで演奏したりして各パートの音程を覚える。 ・全員で合唱し、録音をする。
		2	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで歌ったり、録音を聴いたりしながら、歌詞や旋律の特徴、感じたイメージを話し合い、表現を工夫してグループで歌う。 ◇クラス全体に発表し、友だちの表現のよさを見つけ、表現を工夫していく。
2	声や演奏を聴き比べ、イメージを広げよう	3	<ul style="list-style-type: none"> ・「大地讃頌」「アイダ」「勸進帳」「安来節」の演奏を聴き、それぞれの声の特徴や表現の違いを見つけ話し合い、発表する。
		4	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の話し合いを生かし、グループで練習する。 ・全員で合唱し、録音する。
3	クラスでよりよい合唱にしよう	5	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの録音を聴き、自分たちの声の特徴を生かした表現になるように、イメージふくらませ合唱をする。

3 「学び合い」による思考力・判断力・表現力の評価

授業の様子や子どもたちの発言、学び合いでの変化を記録したり、演奏を録音したりすることで、学級全体としての変容をとらえ評価できるようにした。また、ワークシートやふりかえりも活用して評価した。また、学び合いを構想した時間については、下記の評価規準によって、子どものふりかえりの記述や活動を評価した。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
1	2	友だちの表現のよさを見つけ、歌い方を工夫しよう。	友だちの発表や演奏から、歌詞から想像される情景や、旋律の抑揚、リズムなどの工夫に具体的に気づき、それらを自分の表現に生かし、工夫して歌うことができる。	発言 ワークシート 演奏	自分の意見を持ち、また、友だちの演奏の工夫に気づき、それらを生かしながら、旋律の抑揚、強弱、言葉の発音などを工夫して自分なりのイメージをもって歌っている。	自分の意見を持ち、また、友だちの演奏の工夫に気づき歌っている。	自分なりの意見がもてなかったり、友だちの演奏の工夫に気づけなかったりして、自分なりのイメージもって歌っていない。

4 授業の実際

(1)「夢の世界を」歌ってみよう

①昨年度の1年生の「夢の世界を」の演奏を聴こう

第1時には昨年度の1年生の演奏を映像つきで鑑賞し、歌詞の内容や言葉、旋律やハーモニー、声の出し方や声の特徴、の3点に視点を絞り、感じたイメージを話し合い、発表した。

- 歌おうとしていく気持ちが強く伝わってきた。とてもハモっているような感じがした。低いパートも歌っていてすごい。自分たちに歌えるだろうか。
- 明るく元気のある声で歌っていてすごい。声が響いていたしお腹を使って歌っていたから声に力があった。
- 希望や元気にあふれていて、私たちにぴったりの曲だ。
- 前半のゆったり流れるリズムと後半の力強いリズムの違いがおもしろい。

子どもたちは特にハーモニーの美しさ、男声と女声のバランス、6/8拍子のリズムの流れ、声の出し方といった点に注目していた。この時点ではまだ歌っていないため、歌詞の内容から感じる具体的なイメージを引き出すことができなかった。

この活動の後、グループで音取りをして、全員で合唱を録音し、本時のふりかえりをした。

- 低い声が出ませんでした。
- パートが分かれるところは、ものすごくかっこいいけど、ものすごくむずかしい。
- 階名で歌ったり、音取りをリコーダーでしたりすると、音が覚えやすかった。
- 声や歌い方がバラバラだと思う。

イメージを歌声につなげていくためのポイントをあげた子どもや、一人ひとりのイメージをクラス全体でそろえていく必要があるととらえている子どももいた。

実際に歌ってみるとイメージどおりに歌えないと考えている子どもが多い傾向にあった。

②グループ活動で見つけた歌詞や旋律の特徴、感じたイメージを伝えよう。

第2時ではまず、前時に録音した演奏を聴き、個人の感想をグループで話し合い、学級全体へ発表した。聴くポイントとして、前時に聴いた昨年度の1年生による演奏との違いや、気づきの少なかった歌詞の内容や言葉について聴いてみるよう言葉をかけた。

- 声は聞こえるけど、何を言っているかわかりにくかった。
- 1番も2番も最初のところがもやもやしていて、つまらない。
- 歌ったときは、結構できたと思ったけど、昨年の演奏に比べて声が小さかった。

以上のように、自分たちの思っている表現ができていないという感想が多かった。特に言葉があいまいではっきり聞き取れない、1番と2番の歌詞の違いがはっきりせずおもしろくない、といった歌詞や言葉にかかわる点に気づくことができた。

次に、以上の点をふまえて、歌詞の内容や言葉、旋律やハーモニー、声の出し方や声の特徴の3点について、より具体的なイメージや改善点を話し合ったり、実際に歌ってみたりしながら、グループでイメージをまとめた。

歌詞の内容や言葉	旋律やハーモニー	旋律やハーモニー
<ul style="list-style-type: none"> ・「さあ」のところはたくさんの人に呼びかけるようにする。 ・「夢の世界を」のところは、曲名でもあるので、強くはっきり歌いたい。 ・1番は「落ち葉」だから秋、2番は「小鳥のさえずり」だから春。 ・1番は秋で自分のことを歌っている。2番は春で情景を思いだして歌っているから、1番と2番では気持ちをかえて歌う。 ・前半は朝、後半は夕方だと思う。 ・前半は夕方、後半は朝だと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伴奏が、最初の方は波のようになっていて、後の方は同じ音が続けているから、歌も変化させる。 ・「さーあー」は音を長くのばしているから強く遠くへ向かって歌う。 ・前半は全員同じメロディーで、後半はハモっているから、後半が強い方がカッコいいと思う。 ・「さーあー」はソプラノの音が高くなっていて、テンションがあがる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・息をできるだけ長くして、一つの息に言葉をのせてやさしく歌う。 ・のどをひらいて、声を遠くまで響かせる。 ・語尾までしっかり息がある。 ・パートに分かれているところは、メロディー以外もしっかり響いている。 ・男子の低い声が響いている

グループでまとめたイメージをクラス全体に発表し、友だちの演奏やイメージのよさを見つけ、クラス全体のイメージをさらにふくらませる話し合いをおこなった。

T : 「さーあー」のところ色々イメージが出てきたけど、それは楽譜のどこに書いてある？

生徒A : ないです。

T : 4班さんは「たくさんの人に呼びかける」と言ってくれたけど、どのくらいの人？どこかに書いてある？

生徒B : ないけど、クラス全員くらい。

生徒C : いやもっとたくさんかな。

T : 何で、もっとだと思いますか？

生徒C : フォルテだから。

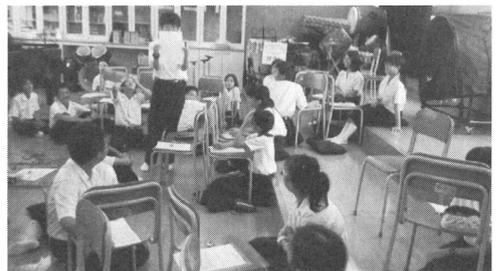
T : では、もし、ピアノだったらどう？

生徒B : 1人かな。

T : なぜそう思いますか？

生徒B : なんかひそひそ話で、こっそりって感じがします。

T : では、このクラスのここのフォルテは、ただ強く歌うのではなくて、35人以上の人に呼びかける「さーあー」ってことだね。決して1人の人に呼びかけるのではなくて。



この話し合いで、歌詞の内容から感じることでできるイメージや、旋律の抑揚やハーモニーのバランスといったイメージがふくらみ、クラス全体で目指す声の方向性が見えてきた。

(2) 形態や曲種の異なる演奏と聴き比べ、感じたイメージを伝えよう。

第3時では、自分たちが目指す「夢の世界を」の合唱にあった声をイメージするために、3年生の演奏する混声四部合唱「大地讃頌」、「アイーダ」、「勸進帳」、「安来節」の演奏を聴き、それぞれの声の特徴や表現の違いを見つけグループで話し合った。

「大地讃頌」	「アイーダ」	「勸進帳」	「安来節」
<ul style="list-style-type: none"> ・男子が二つに分かれていて、とても響いている。 ・お腹の底から出している声。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強弱がはっきりしている。 ・迫力がある。 ・感情が出ている。 ・おしとやかな感じだけど、 	<ul style="list-style-type: none"> ・腹から声を出している感じで太い声。 ・下から突き上げる感じ ・「よー」だけでも色々な 	<ul style="list-style-type: none"> ・息をたくさん吸って歌っている。 ・力強い歌声。 ・裏声？鼻にかける感じ。

- ・リズム感がはっきりしている。
- ・ビブラートがついている。

声が出ている。
・華やかさがある。

- 声の出し方をしている
おもしろい。
- ・声が揺れている。

- ・すっとんきょうな声。
- ・声をのばしている間に音が揺れている。

グループでまとめた声の特徴や表現の違いをクラス全体に発表し、「夢の世界を」の合唱に生かせる点にポイントをしぼって話し合った。

T : いろいろ出た特徴の中で、「夢の世界を」に生かせることがありますか？
 生徒A : 男声は歌舞伎とか安来節をまねしたらいいと思う。
 生徒B : 合わないような気がする。
 T : Aさん、歌舞伎や安来節のどこをまねしたらいいと思いますか？
 生徒A : 声の太さとか、たくさん息を吸っているところとかをまねするといいと思います。
 生徒C : 遠くまで響かせている感じも、まねしていいかもしれません。
 生徒D : それは男声に限らずに、全員まねしてもいいと思います。
 生徒B : あと、オペラの迫力とか強弱とかもまねした方がいいと思います。
 生徒E : 声の種類はいろいろ違うけど、共通するところがいっぱいあると思います。
 T : ということは、迫力とか強弱とか、息の量とか、今のみんなの「夢の世界を」には足りないということですか？
 生徒E : 歌っている時はいいと思ったけれど、比べてみると少し足りません。
 T : では、次の時間にもう一度グループ練習して、迫力とか強弱とか、息の量とかをたしかめてみようか。

このように、第3時で話し合ったポイントを生かすよう、第4次ではグループで練習を行った後、全員で合唱し録音をした。

(5) 自分たちの「夢の世界を」に仕上げるために工夫しよう

第5時では、前時の録音と、第1時の音取り後の録音を聴き比べ、自分たちのイメージする演奏に近づいているかを確認し、さらに、最後の録音ではどういった演奏に仕上げたいかイメージをまとめて合唱をした。



以下は最後の録音前に話し合ったイメージの一部である。

- ・強弱をしっかりつけて、やさしい感じで幸せな風景がうかぶような、クラスの歌声にしたい。
- ・1番、2番の「さーあー」までは前座で、「さーあー」からしっかり歌いたい。息の支えをしっかりしてハモリをきめて、自分たちの「夢の世界を」表現したい。
- ・言葉で出だしをそろえてははっきりと歌詞が伝わるように歌いたい。

以下は第5時を終えてのふり返りの一部である。

- ・最初の録音と比べて言葉がはっきり聞こえてきて、1番と2番の季節の違いをだせた。
- ・みんなで考えた「夢の世界を」になった。聴く人にも伝わると思います。
- ・いろいろな曲の声の出し方と比べて、お腹の支えがたりないと思った
- ・みんなの考え方をたしてクラス全体の「夢の世界を」になったので、大切に歌っていきたい。
- ・最初に比べて、男子の声と女子の声がとけ合っているのがうれしい。
- ・大地讃頌も歌ってみたい。

以上のように、一人ひとりのイメージをクラス全体に広げ、自分たちなりの「夢の世界を」を合唱することができたという自己評価が多かった。また、歌声をよりよくするための技能的な課題や、混声四部合唱に挑戦したいといった記述もあり、意欲の高まりを見ることができると考える。



5 成果と課題

(1) 学び合いの場面について

今回は、自分たちなりにふさわしいと思う表現を工夫し、演奏を深めるという活動の過程に学び合いの活動を設定した。まず、自分の考えや発見、思いやイメージを付箋に書き、付箋を基にグループで話し合った。この中では、声部の役割やそして、グループでまとめた考えや発見、思いやイメージをクラス全体に広げ、共通の思いやイメージを基に表現を工夫し深めていくという、二段階の学び合いをくり返し行った。子どもたちは、音楽から受けていた漠然としたイメージを言葉にしたり、楽譜上の発想記号の意味をより詳しく言葉にしたりすることで、イメージが具体化し、歌詞や旋律の特徴や友だちの表現のよさを、根拠を持って知覚することができた。また、このような学び合いの場面を設定したことは、一人ひとりが自信をもって歌い、合唱をつくり上げるのに有効であった。

また、鑑賞の活動を取り入れ、発声法や音色、ハーモニーの特徴などを聴き比べることによって、声の多様性、曲種に応じた発声に気づくことができた。このことは、クラス全体で目指す声のイメージを共有化することにつながり、より表現を深めることができた。

(2) 学び合いの中での教師のはたらきかけについて

①イメージの言語化

自分の思いや、楽曲から感じることでできるイメージを言語化するという活動を、個人→グループ→学級全体→さらにグループ、とくり返してきた。この学び合い中で、「曲中のどこから、なぜそういったイメージを感じるのか」という根拠を問い返すというはたらきかけを行った。このことは、一人ひとりの漠然とした楽曲への思いを整理しキーワード化することができ、イメージの共有化を図ることができた。こういった学び合いの深まりの結果、クラス全体の歌う方向性が定まり、より深い音楽表現へとつながった。

②ふりかえりの継続

録音やワークシートを用いてのふりかえりの継続は、子どもの実態をとらえたり、自分の思いやイメージがどのように表現へと結びついているかを確認したりすることに有効な手段であった。

子ども対子ども、子ども対教師でふりかえり活動を共有することでさらに新たな気づき生まれ、より表現を深めることにつながった。

③より多くの子どもの考えを出すはたらきかけ

言葉で表す活動を中心にするると、話し合いの時間が多くなり、実際に歌声を合わせるという時間が短くなってしまった。学び合う時間をどう位置づけ、教師のはたらきかけをどのように行っていくかが課題であると考えられる。

(文責 岡 伸彦)